神戸国際大学 キリスト教センター通信　第113号　2024年6月18日

記念日に祈る：沖縄慰霊の日によせて

キリスト教センター長 ミカエル 藤倉 哲哉

6月23日は「沖縄慰霊の日」です。8月15日ほど知られていないかも知れませんが、1945年のこの日に旧日本軍沖縄司令部の指揮官が自決して軍が機能を失い、組織的な戦闘が終わったことから、後に当時の琉球政府が戦没者の霊を慰めるために定めたものです。日本側は住民と軍人軍属を含め約19万人が犠牲になり、米軍の死傷者数も5万人を超えるとされています。

戦争や災害を経験したことがない者には、その恐怖や絶望、またその後の喪失感は想像だにできず、心中察するに余りあるという他に言葉が見つかりません。沖縄の戦いでよく語られるのは地上戦の果てに逃げ込んだ防空壕で焼き殺された民間人、挺身隊に動員され犠牲になった女子学生や疎開船が撃沈されて亡くなった児童の悲劇などです。戦争の悲劇には大小も軽重もなく、戦争は絶対に悪であり、国際法に則っていてもジュネーブ条約を遵守しても、核を伴わない火器による攻撃だとしても決して正当化されるものではありません。

また人間は正義のため、任務のためと称し、戦闘に関係のない違法行為までも躊躇わずに行います。自分たちは正しい目的のために遂行している、相手は敵だから何をしても構わないと信じて疑いません。どの国の兵士でも、相手が戦闘員であろうとなかろうと、子供であろうとなかろうと攻撃します。相手が自分より弱いと知ると、なおさら命令を超えた非道に走る、それが略奪であり虐待や虐殺で、残念ながらどの時代にでも多くの国の軍隊に見られることです。

私たちは、もう殆ど誰も第2次世界大戦の記憶をもっていません。リアルタイムで見ている戦争は、どれも遠いところのできごとです。よく遠いところの戦争や紛争でも私たちの日常の生活や経済に影響が出て、物価が上がったり資源が届かなくなったりするから国際情勢に関心をもつべきだという論調に接します。しかし、これでは日本の生活に影響がなければ知らなくてもよいとはならないでしょうか。どんな根拠をもっても戦争を肯定することはできないのです。

戦争や紛争は必ず人の命が犠牲になります。自衛のために反撃するだけでも双方に被害が生じます。兵士だけでなく子供も犠牲になります。民間人を避けて子供を殺さなかったとしても、その子の親が兵士であったら戦死するかも知れません。国家の威信や領土、資源や経済発展に代えられる人の命、家族の笑顔や幸せなどがあるのでしょうか。

辞書によると「記念」とは後の想い出として残すこと、過ぎ去ったできごと、ものごと、人物などを思い起こして心を新たにすることとあります。喜ばしい記念日には人びとは前向きな気持ちになり、悲しい記念日には再び繰り返さないようにと自らを戒めます。亡くなった人を思い、その魂を慰め、無念な思いを鎮めて、この世に残された者は心を新たに不戦を誓う、まさに「慰霊の日」とは「祈りの日」なのです。

ひとくちメモ

沖縄といえば南国のリゾートのイメージが浮かびますが歴史の教訓も忘れずにいたいものです。

←ひめゆり学徒隊記念

糸満市平和祈念公園→